

令和5年度 事後評価
課題評価委員会における主な指摘事項

研究開発課題名： 結核症の治療成績改善と耐性菌減少のためのヒトと結核菌のゲノム情報の統合的活用

研究開発代表者名： 徳永 勝士（国立国際医療研究センター）

本課題は、アジアで新規患者数、死者数ともに多い結核について、バイオリソースを収集し、「結核治療アジア統合ゲノムデータベース」を構築し、そのデータを基に、結核症治療成績、耐性結核菌、及び副作用出現を予測する「ゲノムバイオマーカー」を同定し、治療効果の予測アルゴリズムを開発した。また、多くの研究成果を論文発表しており、国費留学生の受け入れなど、人材育成の貢献も認められる。加えて、これまでの結核ゲノム解析研究における知見を活用して、COVID-19 患者の重症化因子としての宿主側 HLA 遺伝子の関与を明らかにするなど、初期の目標を大きく上回る成果を得ており、極めて優れていると評価された。なお、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴いフィリピンが不参加となり、参加国が3か国となったことはやむを得ないものの、残念であった。また、インドネシアに対し、タイと同様のゲノム解析の技術移転がされたことは確認できなかった。将来的に HAP3 コホートの検体数は3,000 を予定しており、アジア統合ゲノムデータベースと位置付けるためには、他のアジア諸国のデータを含めることが望まれることから、今後の更なる発展を期待したい。